ナンバ フロンキーパーがIoTに認定
東京進出が市場拡大のチャンスに

新潟県中越地区、長岡を拠点に新潟県内全域を網羅するとともに、地域一番店の管工事業者として冷凍・冷蔵、空調設備で総合エンジニアリング業を展開するナンバ（本社・新潟県長岡市三島新保633－1）。

同社は本年5月21日付にて社長交替を行い次世代への継承を図った。新社長へは長男で前専務の難波俊輔氏。前社長の難波昇一氏は代表権を持つ会長となった。

難波　昇一会長

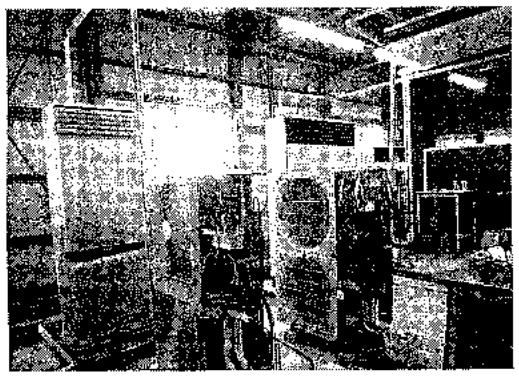
難波　俊輔社長

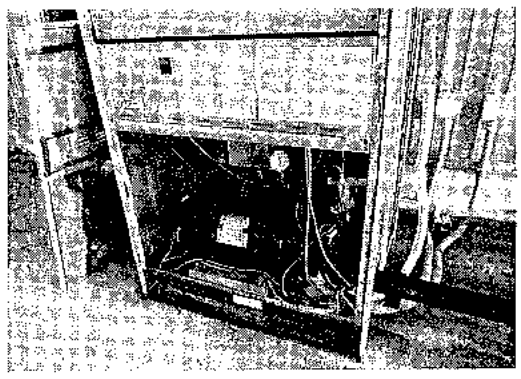
新社長となった俊輔氏は弱冠41歳という若さだが、専務としての実務経験や地域の青年会議所などでの積極的な活動で地縁も増やし、今後の社業発展に専心努力するとしている。

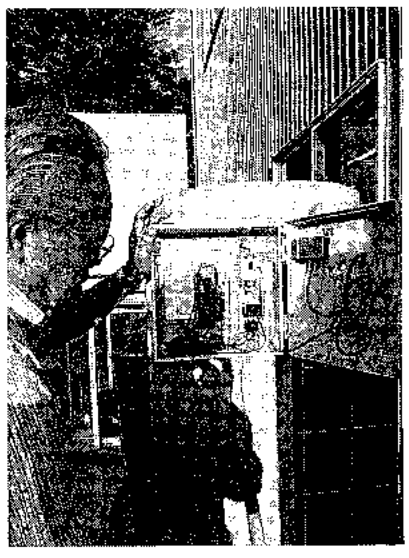
さてナンバは近年、独自の開発製品「フロンガス漏洩検知システム・FreonKeeper（以下＝フロンキーパー）」が好調に推移し、同社の代名詞ともなりつつある。2011年の販売開始以来、プラッシュアップを繰り返し、一昨年には特許を取得。現在形では遠隔監視の精度を高めるとともにWi－Fiなどの通信機器を駆使して、より広範囲かつ利便性の追求を試みている。

加えて先頃、ご当地である新潟県長岡市が主催した〝長岡版イノベーションモデル創出事業〟の一環で主催者のひとつである「長岡市IoT推進ラボ」が経済産業省の地方版IoT推進ラボに選定されたことを記念し、市内製造業のIoTやAIの導入を促進するため、わかりやすい実例紹介や実演等を交えたIoT導入セミナーにおいて、実例紹介の一社として同社が認定され、『冷凍機のフロンガス洩れ検出システムのIoT化』と題したプレゼンテーションを実施している。

フロンキーパーは、そもそも既存の設備機器に後付けができ、ガス漏洩の早期発見とフロンガスの大気放出を防止することを大きな目的としてきた。その構造は冷凍機や空調機の内部にバイパス管を設け、ポンプダウン時に液状でレシーバータンク内に回収した液状のフロンの量を液面の検知によって測定する、いわば「見える化」を実現させた製品。仮に液面の位置が基準値を下回った場合は漏えいしているものと判断し、メール等で異常を知らせることや、異常が生じる前段階にあたる凡そ15㎏の漏えい時点で警報を発するなど、いくつかのメニューを持っているが、進化の形は超音波センサーなどにより、さらに計測スピードと精度を上げるとともに、自社で開発を行った解析ソフトとの組み合わせで台数対応や顧客ニーズ毎の取り出しに自由度が加わってきた。さらにコンパクト化することで従来型の機器の外付けから内装式へと移行させていく構えだ。加えてそのイズムを引き継いだ難波俊輔社長らの次世代によって情報をクラウド化するなど進化は当面、留まりそうにない。






NANBA Visionaryの様子とコンパクト化されたフロンキーパーの心臓部

難波昇一会長は「フロン新法におけるログブック対応もフロンキーパーの設置で毎日実施していることに等しくなる」とし、今後は機器の基盤づくりへも特化して実販に繋がるビジネスを描く。

◇

現在、難波昇一会長の本拠地は本社敷地内に構えたNANBA Visionary. Visionaryとは先見性や想像力のある、また将来を見通したなどの意味を持つが、これを同社の研究棟と位置付け、日々フロンキーパーを含む技術の研鑽に励んでいる。

同社の現況については「基幹事業の冷凍冷蔵設備事業は安定的に推移しているが、今後の人口減少などを見据えていくと現状の地場有力スーパーをはじめとしたスクラップ&ビルドも予定しているよりも若干早く、止まりが訪れるかもしれない。当社ではこうした先の市場を見据えて、よりニッチな部分ではあったが、メーカーもどこも手を付けないフロンキーパーの開発に至った経緯がある。その後は展示会への出展や各所においての説明会や刷り込みを図り、凡そ5年掛かりではあったが、昨年の東京進出などフォローの風が吹いている」と今後に強い期待を示した。

現実、東京営業所（東京都品川区）開設は同社の需要の壁を破りつつある。経済の中心で情報の集積地であり、また首都圏集中購買といったスタート地点にあたる首都圏での営業展開によって、これまでにない大手プラントメーカーをはじめとした各社からの引き合い、問い合わせが集中。今後は冷凍機に限らず、空調機においてもフロンキーパーの優位性を公表していく構えだ。

◇

ナンバは1972年（昭和47年）に難波昇一会長が難波冷凍工業として設立して以来、本年は45年目の節目となる。設立当初は自らサービスへ奔走。時には夜半の依頼に、婦人である栄子氏がハンドルを握り、隣で幼子を昇一会長が抱えて出向いたこともあったという。45年という時を経て「振り返れば、始めた時からから今日までまさに24時間365日の対応を行ってきた」と述懐した。